

### 3. 父親の関与と母親のやりがい・負担感

子どもがスポーツ活動をしている場合の、父親の関与の実態と、母親が関与している係や当番に対するやりがいや負担感との関係についてみていく。まず、母親と父親それぞれで関与しているものの項目数を図表 1 に示した。その結果、2 章でもすでに述べているとおり、母親のほうが多くの役割を担っていることがわかる。

図表 1 母親と父親の担う役割の個数(平均)

	母親(1,079)	父親(987)
関与していること (全19項目)	7.4	4.3

注)項目については図表 3-3・3-4 を参照。「全くしない」以外を選択した個数を算出。

次に父親が担う係・当番の項目数に応じて、図表 2 のように 3 群にわけた。

図表 2 父親の関わりレベル別の分類

	n	%
全く関わっていない	296	27.4
1~3個関わっている	378	35.0
4個以上関わっている	405	37.5

注)項目については図表 3-4 を参照。「全くしない」以外を選択した個数を算出。

分類した 3 群について、母親が担っている役割の個数およびやりがいと負担を感じる項目数を図表 3 に示した。やりがいと負担感に記載している%は、やりがいと負担感の項目数を母親が担っている役割の項目数で割った数値である。つまり、母親自身が担っている役割のうち、やりがいや負担を感じるものがどの程度あるかを示している。

その結果、母親のやりがいは、父親が「4 項目以上関わっている」群で 68.6%と最も高く、「1~3 項目関わっている」群 57.1%と 10 ポイント以上の差があった。一方で母親の負担感、父親が「1~3 項目関わっている」群 39.3%が最も少なく、「4 項目以上関わっている」群 47.1%と 7.8 ポイントの差があった。父親が「4 項目以上関わっている」群が、母親はやりがいも負担感も最も抱えている結果であった。

図表 3 やりがいと負担を感じる個数(父親の関わりレベル別)

	全く関わっていない		1~3項目関わっている		4項目以上関わっている	
	n	個数	n	個数	n	個数
母親が担っている役割の個数	296	5.9	378	5.6	405	10.2
やりがいをを感じる個数	293	3.7(62.7%)	378	3.2(57.1%)	405	7.0(68.6%)
負担感を感じる個数	296	2.4(40.7%)	378	2.2(39.3%)	405	4.8(47.1%)

注1) 役割の項目については図表3-3・3-4を参照。「全くしない」以外を選択した個数を算出。

注2) やりがいは、「とてもやりがいを感じている」+「まあやりがいを感じている」を選択している個数から算出。

注3) 負担感、「とても負担に感じている」+「やや負担に感じている」を選択している個数から算出。

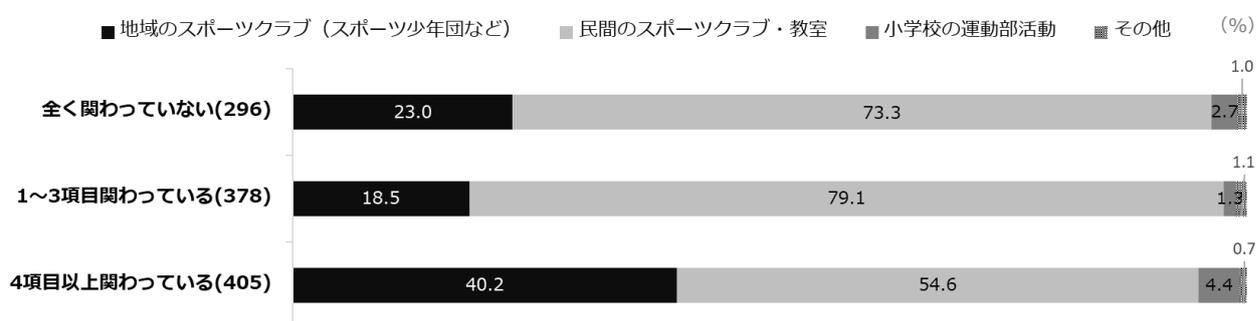
注4) カッコ内の%は、担っている役割に対する割合を示す。

次に、父親の関わりレベル別に、現在行っている種目数と1か月あたりの支出の平均値、標準偏差を示した(図表4)。その結果、現在の種目数や1か月あたりの支出については、父親の関与との関連はみられなかった。また所属している団体の種類をみると、父親が4項目以上関わっている家庭のうち、40.2%が「地域のスポーツクラブ」と回答した(図表5)。

図表4 現在行っている種目数と1か月あたりの支出(父親の関わりレベル別)

		現在の種目数	1か月あたりの支出
<b>全く関わっていない</b>	平均値	1.3	7184.2
	度数	296	296
	標準偏差	0.590	6330.234
<b>1～3項目関わっている</b>	平均値	1.3	7457.8
	度数	378	378
	標準偏差	0.545	7381.302
<b>4項目以上関わっている</b>	平均値	1.5	6770.0
	度数	405	405
	標準偏差	0.775	7777.483

図表5 所属している団体の種類(父親の関わりレベル別)



続いて現在行っている種目をみると、父親が4項目以上関わる群では、地域のクラブで行われることが多い「サッカー、フットサル」「野球」の割合が、他より多い(図表6)。

図表6 現在行っている種目(父親の関わりレベル別)

	全く関わっていない (296)	1~3項目関わっている (378)		4項目以上関わっている (405)
サッカー、フットサル	10.1%	10.3%	«	22.7%
ゴルフ	0.3%	0.0%		2.2%
野球	3.0%	1.1%	<	10.9%
ソフトボール	0.0%	1.1%		1.5%
バスケットボール	4.7%	4.5%		7.4%
バレーボール	1.7%	1.1%		3.0%
バドミントン	1.7%	0.5%		4.2%
ラグビー	0.0%	0.5%		1.0%
卓球	2.4%	1.1%		0.5%
テニス(硬式)	3.7%	2.6%		5.9%
ソフトテニス(軟式)	0.7%	1.1%		1.7%
体操競技、新体操	2.7%	2.6%		4.0%
体操教室、体育教室	15.5%	14.8%		10.6%
バレエ、ダンス	13.9%	10.8%		11.9%
陸上競技、ランニング	2.7%	1.3%		4.2%
水泳(スイミング)	59.5%	< 64.8%	»	40.5%
剣道	0.7%	1.6%		1.7%
柔道	0.0%	0.0%		0.5%
その他の武道	5.4%	6.3%	<	12.6%
スキー、スノーボード	1.4%	0.3%		3.7%
スケート	0.0%	0.5%		0.7%
その他	0.3%	2.1%		2.0%

さらに子どもが所属する団体の活動頻度(図表7)と1回あたりの活動時間(図表8)をみていく。その結果、活動頻度では週2日以上(「週に2~3日くらい」~「週に6~7日くらい」の合計)と回答した割合が、「全く関わっていない」群23.3%、「1~3項目関わっている」群21.7%、「4項目以上関わっている」群46.5%という結果であった。また1回あたりの活動時間も、2時間以上(「2時間くらい」~「3時間以上」の合計)と回答した割合が、「全く関わっていない」群15.6%、「1~3項目関わっている」群12.4%、「4項目以上関わっている」群38.3%で、父親が4項目以上関わっている家庭では子どものスポーツ活動の頻度が多く、1回あたりの時間も長いという結果であった。

図表 7 子どもが所属する団体の活動頻度（父親の関わりレベル別）

	全く関わっていない (296)	1～3項目関わっている (378)		4項目以上関わっている (405)
月に1日未満	0.7%	0.5%		0.7%
月に1日くらい	1.0%	0.0%		1.0%
月に2～3日くらい	6.1%	4.8%		7.9%
週に1日くらい	68.9%	73.0%	»	44.0%
週に2～3日くらい	18.9%	18.0%	«	34.6%
週に4～5日くらい	4.4%	2.6%	<	10.9%
週に6～7日くらい	0.0%	1.1%		1.0%

図表 8 子どもが所属する団体の1回あたりの活動時間（父親の関わりレベル別）

	全く関わっていない (296)	1～3項目関わっている (378)		4項目以上関わっている (405)
1時間未満	12.5%	8.7%		5.7%
1時間くらい	60.1%	64.0%	»	39.5%
1時間30分くらい	11.8%	14.8%		16.5%
2時間くらい	9.5%	7.4%	«	18.3%
2時間30分くらい	2.0%	2.6%		6.4%
3時間以上	4.1%	2.4%	«	13.6%

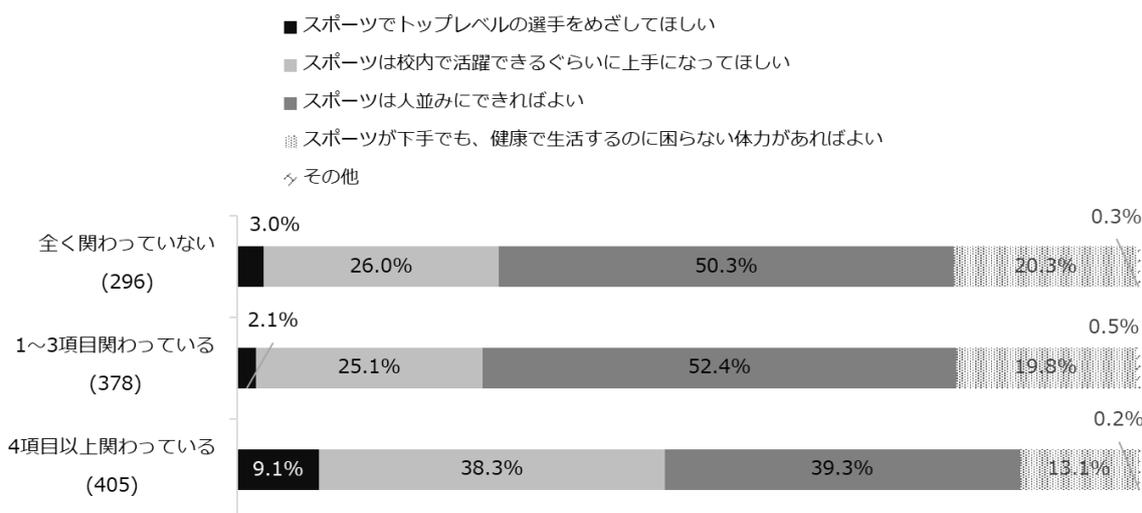
さらに父親の関わりレベル別に保護者の運動・スポーツ歴をみると、母親の運動・スポーツ歴とは関連がなかった(図表割愛)。父親では「4項目以上関わっている」群は他に比べて学生時代に運動・スポーツをしている割合が多く、特に「小学生のとき」は60.2%と高かった(図表9)。

図表 9 父親の運動・スポーツ歴（父親の関わりレベル別）

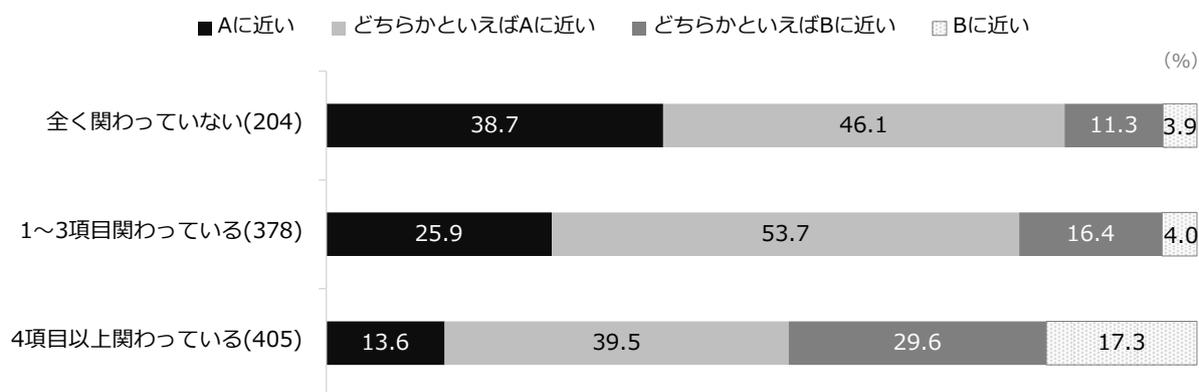
	全く関わっていない (204)		1～3項目関わっている (378)		4項目以上関わっている (405)
小学生のとき所属していた	52.9%	>	47.9%	«	60.2%
中学生のとき所属していた	44.6%		42.6%	<	51.6%
高校生のとき所属していた	27.0%		31.5%	<	36.5%
上記の時期に所属したことはない	16.2%		18.3%	>	12.3%

子どものスポーツに対する保護者の期待をみると(図表10)、学校内で活躍する以上(「トップレベルの選手をめざしてほしい」+「校内で活躍できるぐらいに上手になってほしい」の%)を求める割合が「4項目以上関わっている」群47.4%に対して、「全く関わっていない」群29.0%、「1～3項目関わっている」群27.2%であった。父親の関与が多い家庭ほど子どもへの期待が大きい結果であった。また母親と父親のどちらが熱心に関わっているかをみると(図表11)、父親が「4項目以上関わっている」群の46.9%が、父親のほうがより熱心に関わっていると回答している。

図表 10 保護者の期待（父親の関わりレベル別）



図表 11 子どものスポーツに熱心に関わっているのは誰か（父親の関わりレベル別）



注) A: あなた(母親)の方が熱心に関わっている / B: 配偶者(父親)の方が熱心に関わっている

以上、子どものスポーツ活動に関与している母親の負担感は、父親の関与により軽減されているとはいえない結果であった。これは父親が関与している場合でも母親が多く関与している実態は変わらないためと推察される。父親が全く関わっていない母親の負担感が大きいのは容易に想像できる。一方で父親が多く関わるほど母親の負担感は減ると推測していたが、父親が全く関わらない場合よりも負担感を持つという予想外の結果であった。

父親が熱心に関わる家庭の特徴として、第一に父親の過去の運動・スポーツ歴があるだろう。熱心に関わる父親は、自身が小学生時代に「スポーツ活動をする団体に所属していた」と回答した人が 6 割いて、中学校でも半数が何かしらの運動・スポーツを実施していた。「自分自身が打ち込んでいた運動・スポーツを、自分の子どもにもさせてあげたい」という気持ちから父親が熱心に関わっているのかもしれない。

第二に子どもへの期待感が高い家庭である。この点に関しては最初から母親も期待感を持っていたのか、父親の影響を受けて同じ思いになったのかは、本調査では分析ができない。ただし、こうしたスポーツ活動における家庭内の期待が、母親がより熱心に関わるように促す要因となっているように思う。

今回の結果から、父親が熱心に関わる家庭では母親がやりがいを感じている傾向がみられた。負担感に関しては、父親の関わりによって軽減しているとはいえ、むしろ熱心に関わる家庭では負担になっている可能性がみてとれた。後者については、父親ががんばる分、母親としてさらにならなければなら

ないというプレッシャーを感じている可能性があるように思う。周囲を含めて「子どものことは母親がより積極的ににならないといけない」という雰囲気や思いこみがあり、そのために熱心な父親以上の働きを自分自身に課してしまい、結果的に疲弊することもあるのではないか。こうした「母親がやって当然・やるべき」という風潮が、母親の負担につながっているように感じる。

全体の結果からも、母親の負担は2016年度調査からコロナ禍を経ても、軽減されているとはいえない。本来であれば父親にも役割を担ってもらったほうが負担感は減るはずだが、そうならない背景として、上記で述べたような母親の役割に関するステレオタイプが影響しているように思う。

最後に今回の結果を踏まえて、今後に向けた課題を指摘したい。1点目は、父親が関わる種目の偏りとクラブ存続の危機についてである。父親が熱心になる習い事は、地域のクラブが主で野球やサッカーといった特定の種目に限定される。活動頻度も多く、1回あたりの時間も長いのが特徴である。母親によっては、自身は興味がなくても熱心なふるまいを求められる場面もあり、負担感が募ることもあるだろう。しかし、そうした状況を生み出し続けていくことは、本来誰もが気軽にできるはずの地域のクラブを敬遠していく要因となり、少子化の影響もありチームの存続自体を危くする可能性がある。不要な係・当番は廃止していくことが望ましいが、すべてのクラブで簡単に実現できる問題ではない。ただし現状のままでは、将来的にこれまで多くの母親が負担を感じながらも支えてきたクラブそのものがなくなる可能性があることを、当事者に対してだけでなく、社会的にも伝えていく必要があると感じる。また、家庭内の分担という点では、自身があまり興味をもてない種目のサポートであっても、父親も関わる姿勢が重要である。

2点目は、父親を取り巻く環境についてである。2022年10月には「産後パパ育休(出生時育児休業)」の創設や「育児休業の分割取得」が施行されたのも記憶に新しい。男性は、職場では成果や出世へのプレッシャーがあり、家庭では良き夫や父親であることを求められる。母親と同様に父親も時代と共に、求められる役割は増えてきている。ただ実際に家事・育児負担はコロナ禍でも女性の方が多く、働く女性も一定数いることから女性への負担が多いことは否めない。子どものスポーツに関わっている母親と父親は、それぞれが大変な中で、サポートしている点を忘れてはならない。そこを踏まえた上で、父親の関わり方を考えた時に、母親中心の係や当番という体制になかなか入りづらいという気持ちも少なからずあるように思う。今後は、父親がサポートに入りやすい体制づくりも必要ではないだろうか。またスポーツの現場だけでなく、職場でも子どもが病気の時に取得できる看護休暇とは別に、子どものために取得できる特別休暇の設定といった環境整備も重要になってくる。もちろん制度にとらわれず、子育てをはじめとした職場外の活動がめぐりめぐって、仕事に活かされる可能性があることに期待をかけて、推奨するような社会風土が醸成されるのが望ましい。

こうした取り組みをすることで、子どもの運動・スポーツ活動の場において、母親が支えて当然という雰囲気を取り除き、ゆくゆくは「父親が関わるほど、母親が引け目を感じることなく、素直に負担感が減る」という本来あるべき結果になるように思う。さらに子どもの運動・スポーツの場に母親だけでなく、父親も関わることは、子どもの豊かな成長や家庭生活の充実は何より寄与するのではないだろうか。

(清水恵美)